コミュニケーションの一手段としての顔造り

中　村　平　治

先日、スポーツ新聞に目を泳がせていると、お二人の顔写真が載っており、王監督の方には「恵比須顔」と、野村監督の方には「仏頂面」と、caption がそえられているのに気づき、私は、思わず、相好が崩れ、言いえて妙だと感心した。表情の叙述は、言葉で、「ご満悦」「悲嘆に暮れ」と説明することもできたであろう。しかしそのようにしなかったところに伝達の迫力を改めて思い知らされた。

表情描写（non-verbal）と言葉による説明（verbal）のどちらの対話手段がより伝達力があるかは、もちろん、情況次第であるが、上の写真の場合、競わせるまでもないであろう。

表情に迫力があるなら、後はどんどん活用したらいい。といっても、しかし、先立つものがないと、しようがない。表情表現として、他にどのようなものがあるのか、その意味・用法は何かが不明では、ままならぬからである。そういった知識がないと、活用するにも、任せられないであろう。

そこで、不明点を再認識し、明かすのが、論考の出発点になる。

1　不　明　点

どんなに効力のある「表情」といっても、この意味・用法の知識がなければ、ゼロ価値に等しい。さきほどの「仏頂面」でも、これが「膨れ面で、不機嫌な顔付き」を指すことが分からなければ、使用できないからである。

試しに、論点の「顔造り」の中心である「目」の項を「国語辞典（明治書院）」で引いてみる。慣用表現が並んでいる。正直いって、次に挙げる「表情」は具体的に何を指すのか初め私には分からなかった。

「目に角を立てる」
「目を三角にする」
「目の色を変える」
「目を細める」
「目を丸くする」
「目を皿にする」

これらはいずれも具体的な「目つきの描写」であるだけに活用してみたいという衝動にかられるが、如何せん、意味が不明では、どうしようもない。例えば、「怒り」を意図した表情なのか、「驚き」を表明した表情なのか、「喜び」に浸った表示なのか、といった含意が汲み取れないようでは、自信をもって使用できないであろう。

この種の不明点は、しかし、辞書を捲ることで比較的容易に晴らすことができる性質のものである。作業は容易でも、当論では、確認のためにも、一応、調査した報告をしたい。

これはこれとして、表情の特定化によっては、誘発の原因が容易に把握でき兼ねるものもあるので、要注意である。

今、「目」の動きを示す例を挙げたので、今度は「顔」に関する例を引き合いに出そう。

「顔から火が出る」
「顔に紅葉を散らす」
「顔が真っ赤になる」
「顔を赤くする」

これ等の慣用表現はいずれも、「恥じらい」の気持ちが導引の一つになっているが、内訳は、更に奥深いところに求めると、細分化されるであろう。同じ「恥じ」といってもそれは「性格的なもの」なのか、「心的なもの（羞恥心）」によるのか、「性的な興奮」に端を発するのか、単なる「酒酔い」とか「日焼け」に起因するのか、それとも、これらの複合に誘発されるのか、といったことがようとして分からないままに残されることもありうる。この種の不明点は該当の事例を数多く集め、然るべき、文脈を特定化するしかない。地道に調べ挙げるしかない。

それから、もう一点、解明への調査は日本語が主役になるが、特殊性を際立たせるために英語との比較をも試みる。

日本人は、西洋人に比べ、表情に乏しいと、よく言われる。「顔に表情がない」「何を考んがえているのかわからない」「神秘的だ」「のっぺりした顔で、まるで能面だ」などと嘲笑的な言い下しをされる。こういった側面は確かに当たっている。彼らの顔の動きを、テレビとか映画で拝見すると、激しい。日本人は、おとなしくて、静かであるという印象を強くする。外見的には、そのような際立ちの違いは是認されるが、しかし、それは相対的な違いであって、日本人は日本人なりの押さえた顕著な顔の表情を造り出していることに気づく。能面は真正面（英語）から観察すると、確かに、無表情であるが、見る角度を変えると、さまざまな動きに変ずることを知るのである。日本人は目立たないが、多様性のある顔の表情を造るのであり、この性向は、実際に、日本語特有の多種多様な叙述の仕方が存在していることからも、肯定されるであろう。例えば、「目」による表情の叙し方に、日本語では「目に角を立てる」「目を三角にする」「目の色を変える」などがあるが、英語にはこの豊富さはない。

以下、表情の具体的な内訳を見出しとして掲げ、それぞれがどういった感情と照合するのかを目

標に調査を入れる。情況が複雑に、繊細に絡んでいると推察されるので決定的な言及には至らないと恐れるが、できるだけの把握はしたい。表情のトップ・バッターとして、もっとも顕著な伝達力を発信すると目される「笑い顔」を揚げる。笑い顔は文字通り顔全体で表現するため、感情の露呈として最適であると観測されるからである。

笑顔を造る「笑い」は分野が広いだけに、高音量の「高笑い」「大笑い」から、消え入るような低音量の「微笑」「含み笑い」まで多様に設定される。この仕分けから、論を開始しよう。

2　笑　い　顔

日本人特有の「笑い表情」の例として、抑制の効いた曖昧な「微笑」が、先ず、挙げられよう。（　）内はそれぞれの解説である。挿絵は、明治書院国語辞典からの引用。

「恵比須顔（挿絵に見る通り、鯛を釣り上げて嬉しくてしようがない、かといって大笑いするのは、はばかられ、にこにこするにとどめる）」
「相好を崩す（喜びのあまりにこにこする）」
「微笑む（声を立てないで優しく、にっこり笑う）」
「ほくそ笑む（うまく思い通りになって、密かに笑う）」
「頬が緩む（嬉しくて思わずにこにこする）」
「顔が綻びる（固かった表情が和らぐ）」
「愛嬌のある（親しみのある、にこやかな）顔」

その他、類する表情として「薄笑い」「忍び笑い」「含み笑い」「苦笑」などが加えられよう。いずれの笑いも、日本人特有の「曖昧志向」に繋がる仕種だと言えよう。日本人はこの種の抑えた笑いを好むと同時に、一方では、声高らかで大げさな、朗らかな笑いをも敢行する。次の事例に見る通りである。

「抱腹絶倒（腹を抱え、倒れそうになるほど大笑いをする）」
「呵呵大笑（からからと大声で笑う）」
「顎を外す（顎が外れるほど大笑いをする）」
「爆笑（大勢の人達がどっと笑う）」
「高笑い（頤を解し大笑いする）」

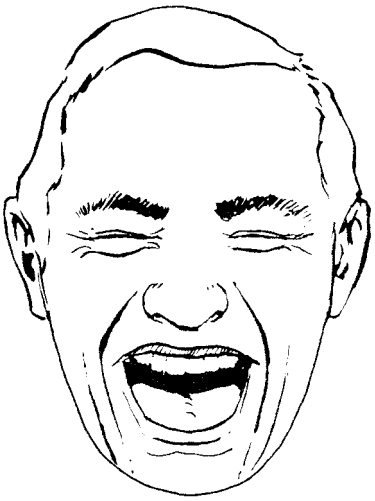
笑いのタイプを「高笑い」と「低笑い」に分けるとすると、日本人は後者に、英語国民は前者に

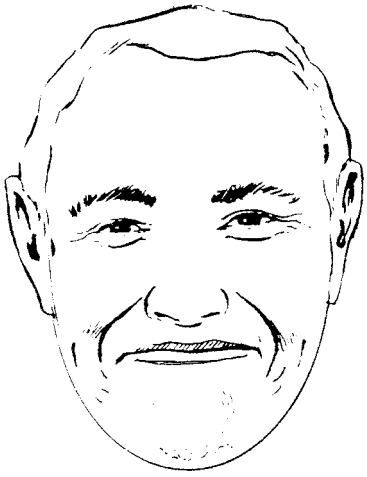
傾向くと云って良いであろう。彼らは少しでも可笑しかったり、嬉しかったりすると、誇張的に笑い飛ばそうとする向きにあるが、われわれは、むしろその感情を手で隠すなどして抑えようとする。

「笑い」は音量の他に、「善」・「悪」の気持の持ちようによって分けられる。「笑う」と言えば、普通、陽気さとか面白さの雰囲気が想定されるが、悪意に満ちた蔑視の気持もある。「侮る」とか「嘲る」とかいうのがそうで、同じ「笑い」でも陽性志向の文字通り「けらけら笑いこける」のもあれば、相手を陥れる「嘲笑」とか「冷笑」も存在するのである。「会議での一言が嘲笑の的となる」「冷笑を浮かべる」といった文脈で用いられる。ということは、つまり、「笑い」は高い音にも低い音にも、また明にも暗にも展開しうる中立的な動詞だということでもある。これは英語の laugh についても同じように言える。

It was so fnnny, we could not help laughing.
They'll laugh at you if you can't think of a better excuse.

ところで、実際の「笑いの表情」というものがどのような姿・格好のものになるのかについて、画家のデッサンを見いだしたので、ここに披露したい。どちらが開放的な「高笑い」で、どちらが遠慮がちな「微笑」であるかは断るまでもないであろう。





挿絵を見る限り、「笑い」の顔造りは普遍性があるが、したがって、この点で日英語は共通すると見てよいが、しかし、「言葉」の面で違いがあるので、注意をしておきたい。

日英語の違いは類義語の豊富さに端的に示される。同じ中型の辞書をめくると、日本語は「顔を綻ばす」「おとがいを解く」「顎を外す」「腹筋をよる」「腹を抱える」「笑壺に入る」「相好を崩す」「ほくそ笑む」「綻ばす」「苦笑い」「含み笑い」「こうしょう」「微笑」「苦笑」「爆笑」「びんしょう」

「きょうしょう」「呵呵大笑」「破願一笑」「抱腹絶倒」など20個を数えるが、英語は laugh（声を立てて笑う）、giggle（くすくす笑う）、titter（しのび笑いをする）、chuckle（低い声で満足げに笑う）、smile（顔だけ笑った表情になる）、grin（歯を見せて声を立てずに笑う）など 5 個しかない。違いは歴然としている。

3　泣　き　顔

当節では、「笑い顔」の対極にある「泣き顔」について議論する。「笑い」の表情が「喜び」「嬉しさ」その他に起因するとすれば、ここの「泣き」の態度は「悲しみ」「嘆き」その他に引導されると見て良いであろう。われわれ人間の営為には明もあれば暗もあり、笑い顔もあれば、泣き顔もあるのである。

「泣く」表情の様々を叙述する事例を、次に挙げよう。我々の視点は、これまでと同じように、細分化された表情と感情の照合である。これを、使用される文脈を覗くことによって、摘出しようというわけである。

「慟哭（身を震わせ、大声を出して泣く）」
「咽び泣く（声を詰まらせて）」
「泣き崩れる（正体もいほど取り乱して泣く）」
「目頭が熱くなる（感激して涙が出そうになる）」
「涙ぐまして（聞いていて涙がでるほど哀れである）」
「映画が終わると、目を赤くした観客が何人もいた」
「人々の温情に感泣する（感激のあまりに泣く）」
「涙を呑む（涙が出そうになるのを堪える）」

上の事例は、「泣く」という行為に伴う声量の点で捕えたものであるが、「大」と「小（抑制されたもの）」に大別されよう。「慟哭」派と「目頭」派に分けられよう。「泣く」ときの声量については、日本語に豊富にある擬態語によって更に細分化される。次の例に見る通りである。

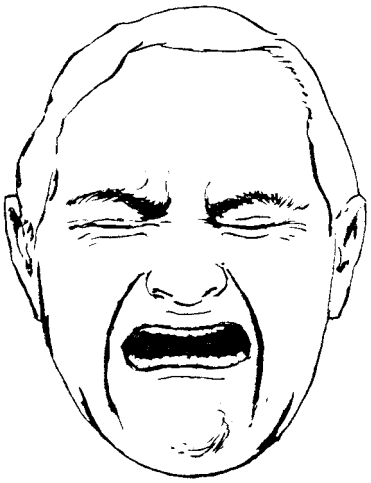
（大）：「わあわあ」「おうおう」「あーん、あーん」
（小）：「しくしく」「めそめそ」「さめざめ」

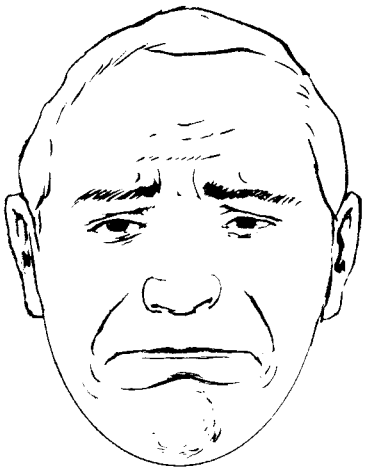
擬態語による修飾語の弁別は、必ずしも分明でない面もある。例えば、「おろおろと泣く」とか「わなわなと泣く」は声量的にどちらにくみするであろうか。

次に「泣く」行為の原因を文脈に探ってみよう。「泣き顔」はいかなる感情がその発信源になるであろうか。

「別れを惜しんでなく」
「映画の最後の場面に泣く」
「泣いても、笑っても今日でお別れだ」
「泣く子も黙る代官様だ」
「嬉しさとも、有り難さともつかぬ涙」
「悲しみが湧いて熱い涙が流れる」
「嬉しさに涙がとめどなく流れる」
「かわいそうだとポロポロ涙をこぼす」

われわれが泣き出すのは、普通、何か悲しい出来事に遭遇した時であるが、反対に嬉しいときも、感に堪えなくて、涙を流しがちになるものである。また、同じ「泣く」としても、口を大きく開け奔放に泣きジャクッたり、反対に、口を噛み締め、押し殺そうとしたりするものである。これについては、挿絵が示す通りである。日英語に共通する顔造りである。





「泣く」という表情に関して日英語が共通する事例として、次の例が加えられよう。

She burst into tears when she learned her son's death.
彼女は息子の死を知らされどっと泣き崩れた。

She cried with tears of sorrow and grateful joy.
彼女は悲・喜の涙で泣いた。

一方、違いの事例として、類語と擬態語の種類が、日本語に多く、英語に少ないことが指摘できよう。日本語の場合、「慟哭」「号泣」「哀号」「泣き叫ぶ」「嗚咽」「涙に咽ぶ」「咽ぶ」「すすり泣く」「泣き崩れる」「袖を絞る」「感泣」などなど、それに、「おいおい泣く（大人が情けなく泣く）」「さめざめ（情けない気持で、静かに泣く）」「ポロポロ（大粒の涙が零れ落ちる）」「わあわあ（大声で泣きわめく）」などなど数多くの形態のものが挙げられる。

しかし、英語の場合、cry（喜び・悲しみなどで大号をたてる）、weep（涙を強調した泣き方）、sob（声を詰まらせたり、しゃくり挙げたりして泣く）、whimper（子供がしくしく泣く）など閉鎖的である。

断りが遅れたが、ここで、論題の「顔造り」の「顔」がどういったものをカバーするのかを押さえておこう。この図取りは該当の例文を引き合いにだすのに欠かせない基礎作業である。先ず、「顔」という文字が使用されている語句である。「笑顔」「喜顔」「顔立ち」「顔合せ」「顔向け」など、次に「顔」と同義語の「面」「風貌（フウボウ）」、即ち「面相」「面と向かう」「仮面」「馬面」「赤面」など。それから背後に「顔」とか「面」を想定させる「笑う」とか「泣く」も同類である。「笑う」とか「泣く」という行為は「顔」そのものの働きと見なす。例えば「大声でハハハと笑った」といえば「顔」が省略されていると見なす。逆に言うと、「口」の動きは「顔」そのものの動きと同等と見なす。「顔」の一部（口）イコール「顔」とみる。同じことはその他「目」「頬」「鼻」などについても当てはまる。「目を三角にする」「四角い仁鶴」「口を尖らす」なども論題も「顔造り」の対象になる。

他に「血」とか「汗」も顔面に現れると、「顔」の一部と見なす。「赤面の至りです」とか「汗顔の至りです」も分析の対象になる。

4　顔　の　形

われわれの「顔」は、生来的に固定していて、勝手に造り挙げることはできないが、しかし言葉の上で、「丸形」とか「角ばった」という風に創造的に捻出することはできる。創造者によって形容された顔の形について、「いや、丸でない、四角でないの」などと目くじらを立てるものは誰もいないであろう。一種の「誇張」また「比喩表現」として容認されている。

以下、われわれの顔が、どのような形として描写されるのかを示し、該当の文例を添え、その形が好意的な文脈で使用されるのかどうかを指摘しよう。

（a）丸形。

「目がくりくり（丸く）していて、人なつっこい顔だった」

「丸顔の、華やかな容貌である」

「血色のいい、金時のような丸顔」

「ふっくらとした、色白の、瓜実顔の美人だ」

「ふくよかな丸顔の、そう恵比須顔である」

日本人にとって、「丸」の意味は「二重丸」という評点の例からも推し量れる通り、「優良」の含みをもつ。「丸みを帯びている」といえば人間関係が穏やかに転ばせることを暗示する。「丸」の好意性は上の文脈で整合的に用いられることからも支持されよう。「丸顔」の持ち主は「緒善の根源」である。この意味合いは、「丸」が「圭角（とげとげしい）」の対峙点に位置づけられることからも知れよう。

ところで、日本語の「丸形」に対する英語は round（circular）であるが、意味（感情）的に共通しない面が多い。ただし形式的には round face, with runded eyes, などとあり、更に次の表現も可能で、日本語に近いと言える。

The baby's cheeks have rounded up.
赤ん坊の頬が丸まると太ってきた。
Her eyes grew round with delight.
彼女の目は嬉しさのあまり丸くなった。

しかし、共通するのはその程度で、使用頻度において、また好意性において、日本語の方が格段に優遇されている。英語の、round に対する不人気から、例えば「恵比須顔」が好意的で理想の表情だと説明するのに苦労するであろう。「ふくよかな」といった形容は、英語国民にとっては「肥満児」の対象にされやすいからである。「丸々と太った」と説明を補足すると、印象はますます悪くなるであろう。

（b）角形。
角張った形、三角、四角形を含む。

「本当に憎らしいじゃありませんかと、彼女は口を尖らせた」
「角張った顔（ごつごつした顔）」
「四角張る（かたくるしい）」
「彼の言動は、角角しかった（穏やかでなかった）」
「四角四面（生真面目で、かたぐるしい）」
「角がでてきて、丸みがなくなる」
「彼は怒りだし、目を三角にした」
「目に角を立てる（目をつり上げて怒る）

他者の顔を上のように叙述した観察者は、「丸形」でそうしたときとは対照的に、非友好的な、

白い目で見ていると言っていいであろう。日本語の「角」は、動物の頭にとんがっている攻撃用の骨状のものを連想させる。「角つき合わせる」「角を出す」「角を矯めて牛を殺す」「目に角をたてる」などはいずれも喧嘩腰の文句である。

かかる攻撃用の武器は、ない方が人間関係は丸く納まる。穏やかになる。「丸形」と「角形」はそういった対峙関係を意識して形容されると、日本語に関して、言えるであろう。

しかし、英語は少し事情が違う。日本語と同じ形容の仕方が見出せるが、特に悪意はないようである。

angular face，irregular face，
craggy face，bony face，rock face，rugged face，･･･

（c）大・小形。

ここでは面積的な広がり、長いのか、大きいのかといった形をも含む。

「大きな顔」「小さな顔」「広い顔」「長い顔」「馬面」
「顔が広かった」
「顎が長かった」
「額の広い、面長の顔で、口が小さかった」
「顔の造作がひとまわり大きく」
「鼻と口の間も距離がある」
「私は、目をおおきく見開き、いわゆる目を皿にした」
「我が子の可愛さに見とれ、目を細めていた」
「彼女は顔が膨れッ面で、しかも、大きかったので、見るに忍びなかった」

顔の形容が好意的なものか、白眼視的なものかは、個人（日本語）の好みによる場合もあるが、民族（英語）のそれによる場合もあるので要注意である。

例えばクレオパトラの鼻の高さがよく問題にされる。日本人にとって、鼻は小柄にできているので、高さへの憧れが強いが、英語国民にとっては、接吻するとき邪魔になるほど大柄で肉太にできているので、低さ・小ささへの願望が強い。この見解の相違のため、同じ形の鼻が賞賛にも蔑称にもなりうる。この点が日英語の違いである。

もちろん、個人（日本人）の好みは更に細分化される。試しに、次の顔の形容は「あなた自身（個人）」にとって、どの順位で好まれるであろうか、また、「日本人（全体）」と英米人の好みはどうであろうか。

好み			顔の形容
個人	日本人	英米人	
			丸顔 (vound)
			瓜実顔（やや面長で (oval) 丸味のある顔）
			平顔（のっぺりした (flat) 顔）
			長顔（縦が長く (elangated)、横との均整に欠く顔）

（d）その他の形。

これまでに挙げた「丸」「角」「大」の他に、次のものが顔の形状として加えられる。

「顔をつぶす」「よじれた顔」「のっぺりした顔」
「膨れた顔」「しかめっ面」「渋面」「八の字を寄せた」
「口を一文字に結ぶ」
「柳眉を逆立てる（美人が眉をつり上げて怒る）」
「鼻の穴が膨らんでいた」
「未熟な南瓜のような気味の悪い顔」
「やせこけた顔」「キツネのような顔」
「皺の寄った顔」「老主人の長い顔に驚いた」

顔の形状に関する日英語の比較であるが、「丸」とか「三角」の場合は単純で、日本語特有の慣用表現として使用されることが多く、日英語は違っているのが普通であるが、形状が複雑になり、慣用表現でなくなると、日英語は共通し易い。次の実例が示す通りである。

Don’t frown at me.（しかめっ面で俺をみるな）
He has a pimply face.（ニキビだらけの顔をしている）
He has a cliff face.（崖の表面のような顔）
She has an emaciated face.（痩せおとろえた顔だった）
She has an fleshy face.（でっぷりした顔であった）
His face was haggard with anxiety.（彼の顔は不安でやつれていた）
He has a rocg face.（岩肌のような顔をしていた）

日英語は共通するからといって、完全に重なるわけではなく、微妙な違いも残っている。例えば、日本語の「目（顔）に角をたてる」とか「口を尖らして」は、英語の horn とか sharpen に対応するが、しかし、微妙な違いも引き出せよう。日本語の方は、あの鋭利な槍の矛先を連想させ、人間関係を攻撃する。といった含みを持つが、英語の方は、単純である。

英語の He has a horned face. また He pouted his lips. は特に人間臭い「攻撃性」を内包しない。

5　顔　の　色

「顔の色」は、上の「顔の形」と同様人為的に引き起こせない性質のものである。意図的に統率できる生理現象ではないからである。顔が赤くなったり、青くなったりするのは、血液流通の濃淡によって生起する自然現象だからである。

しかし、人間は「言葉」の世界で勝手に動かすことができるようである。実際には不可能なのに、言葉化で「血相を変えたり」「顔色を変えて怒ったり」「驚いて目を白黒させたり」することができるのである。

この変色は、特に「表情を観察する人」によって作為的に大袈裟に執行される。例えば、酒に酔ったり、恥ずかしがっているとき、顔面が少し赤みがかってくるが、そこに異常性を見いだし、拡大的に「顔が赤くなった」とか「顔に紅葉を散らして」といった言葉化を敢行するのである。顔がいろんな色に変形するとなると、そこに、本論で主軸にしている「表情と感情」の照合の問題が浮上してくる。

（a）赤色。

類する色に「血色」「紅色」「赤らみ」などがあり、次の文脈ないしは感情と共起する。

「紅顔の美少年（血色のいい若い男の子）
「皆の前で褒められ思わず顔を赤らめた（恥ずかしさや照れで）
「顔から火がでる（恥ずかしくて、顔が真赤になる）」
「真赤になって、怒鳴り込む」「性的に興奮すると、赤くなる」
「酒の席での失態を聞かされて赤面した（ひどく恥じる）」
「赤面の至りです」「顔面に赤みがかった喜願が浮かぶ」
「ビールで顔が赤くなる」「心の平衡を失い、顔を赤らめる」
「顔が火照る」「顔を紅潮させる」
「嬉し涙で赤い目をしていた」「真赤になって怒鳴ってきたわ」
「あの女、私を見ると、真赤になって、こそこそと逃げて行ったわ」

赤面の原因は、上の、またその他の文脈から、次の感情から生起するようである「恥じらい」「性的興奮」「健康な血色」「多血質（高血圧）」「酔っ払い」「怒り」「歓喜」「恐怖（赤面恐怖症）」・・・

赤面の表情は普遍性があり、日英語で共通しやすい。

「彼女は恥ずかしくて顔が真っ赤になった」
She blushed（=became red in the face）for shame.

「顔から火が出た」
My face was burning（=on fire）with shame.

She blushed（=became red in the face）for shame.
彼女は恥ずかしくて顔が赤くなった。

He flushed red as flame for exitement.
彼は興奮して火のように赤くなった。

His face was burning with shame and rage.
彼の顔は屈辱と怒りに燃えていた。

Her face was gleaming with pleasure.
彼女の顔は喜びで輝いていた。

（d）白色。
「白紙」「純白」「色白」なども含む。使用される文脈は次の通り。

「女みたいに色の白い、顔ののっぺりした奴だった」
「白面の書生（未熟もの）」「白目（悪意のこもった冷たい目つき）」
「色白の瓜実顔の美人」「雪のように白い肌」
「貧血を起こした白い顔」「白百合のような顔」
「白い歯を見せない（笑顔を見せない、まじめな顔）」
「鼻白む（気後れした顔付きをする。興醒めた顔をする）」
「博士の白い顔を見ていると、哲学書を読んでいるのがふさわしかった」

日英語の比較であるが、「白色」は「赤色」の場合に比べ、共通点が少なく、相違点が目立つ。例えば、「色白で、やわ肌」という形容は、日本語では、女性に対する高度の「褒め言葉」である。日本人にとって「白」は「純白」、「純真」を意味する。

雪のように「白い」のは、美しい美人の形容として優に溶け込むが、しかし、英語には「白」イコール「美」の発想は特にない。ないため She has a white face. といった言い方もしない。日

本語で、目と白は良く適合する。「白い目で見る（蔑視する）」といえば、「冷淡」とか「にらむ」といった行為と結びつく。日本の故事に、嫌いな客がやってくると、目を白くし、気のあった人がやってくると、青い目で迎えたとある。こういった故事が生きていることも、日本語に開放性を与え、英語に閉鎖性を与えているのであろう。

（c）青色。

蒼白・青白・蒼い・青い・緑色なども含む。次の実例が拾える。

「青ざめた顔はまだ回復していない」「青い顔色（病気で血の気がない）」
「顔色が死人のように青ざめていた」
「顔が蒼白になった」「腹が立ち、顔が青くなるのがわかる」
「昌子は真っ青になった」「顔色が悪い、病気で青ざめる」
「病気や恐怖で青ざめる」「青膨れ（顔や皮膚が青くむくんでくる）」
「青白いインテリ（顔色が悪く、実行力に乏しい）」
「小さい目を引っ込めて、三角にし、すっかり、真っ青になっている」
「紙のように青ざめた」「顔は怒ったり、恐くなったりすると、青くなる」
「青息吐息（苦しそうな息遣い）」
「青二才」「青臭い」「ふつつか」（青は蒼・碧の代用）
「不合格の知らせに青くなる」「青い顔をした病人」

「青色」は人の顔に関して用いるとき、血の気のない病状とか未熟者に当てられるのが主である。「青い顔」といえば、マイナスの指向性が強い。「血の気がない」ときは、日本語では「青」か「白」が当てられる。生理現象として、「青」を当てるのはどうかと思われるが、日本語の特殊性によると考えられる。英語では青に対しては pale を当てるのが常態である。例えば He looks・・・。のところには、blue でなく、pale を当てる。

英語で人の顔に言及するとき、blue を用いれば、それは sad and without hope の意味に限定される。病状に対してではない。したがって、I'm feeting blue todey. といえば、「悲嘆にくれている」といった含みになるのであり、日本語の「青」の「病気」のイメージとは離れる。

日本語の「青」が英語の blue でなく、pale に近いことは、a pale complexion（=as pale as death, pale with fright, turn pale）などの用例から推し量れよう。日本語では「青ざめた顔色」「死人のように青ざめて」「驚いて青くなった」などと、言い表わせるが、英語では、blue を代わりに当てられない。英語の pale は日本語の「色が薄い」、つまり a pale green は「薄緑」に、a pale red は「薄赤」にむしろ近い。

未熟もののことを、日本語では「青（二才）」の例に見るように、青を当てるが、英語では green を当てる。この点も日英語が違っている点である。

日本語の「青」は、英語の対応型 blue とは著しく異なっているので、要注意である。「blue＝青」の足枷から抜け出すように心掛けたい。

（d）他の色。

黒・黄・土気色。次の実例が拾える。

「色は黒いが、整った顔立ちをしていた」
「土気色（焦燥しきったときの血の気のない顔）」
「くちばしが黄色（未熟もの）」
「顔を曇らせる（表情が暗くかげる）」
「顔はおうだんのためか黄色であった」
「顔色が黒ずんで、不健康そうだ」
「真っ黒に日焼けしている」「顔は黒くまるで薫製のようだ」
「顔が暗緑色で描かれた油絵の死面（デスマスク）のようだった」

「黒」「黄」による形容事例は、ご覧の通り、少ない。顔色が変色すると、病的に異状と見なされるのは、これまでに挙げた色の場合と同じであるが、選別は病気の内容によるようである。顔色は、黄だんであれば、黄色くなるであろうし、日焼けによるようであれば、土人のように黒色になるであろう。

この種の変色は普遍性があり、どの言語にも当てはまるが、違っている面もあるので要心したい。例えば、日本語では「彼は日焼けした」とか、強調的に「彼は真っ黒に、日焼けした」といった形容をする。しかし、英語では、前者は He got sunburnt. となり共通するが、後者は He got blackly sunburnt. とはならない。He got deeply sunburnt. といった別の形容を当てざるをえない。

ここで「顔色」に関する日英語の色彩全般に渡る、類似点・相違点を補足しておこう。

類似点：

His face was crimson with shame.
「彼の顔は恥ずかしさのあまり真赤になった」

Her face was red with embarrassment.
「彼女の顔はきまり悪くなって赤くなっていた」

相違点：

His face blanched with fear.
「彼の顔は恐怖で青ざめた」

（英語の blanch は become white なので、代わりに「白くなった」を当てる）

「私が目の黒いうちは、そんなことは許さない」
I won't permit such a thing as long as I live.
（日本語を英語に直訳すると、as long as my eyes are black. を当てるべき、しかし、英語には、この慣用表現はない。）

「彼女は彼に会って顔から火がでる思いをした」
She blushed as red as a rose with shame to see him.
（日英語どちらも比喩表現であり、この時点ですでに違うことが予測される。中立的な表現にするなら、それぞれ、
「彼女は彼に会って恥ずかしさのあまり、顔が赤くなった」
She blushed（=became red in the face）for shame to see him.
といった具合に互いに接近する。つまり「恥じらい（shame）」の感情が「赤面」にいたるという点で、日英語は共通するが、言葉化の段階で離れるのである。日本語は「火」の色に、英語は「バラ」の色にすがるようにできている）

「彼は怒り、顔に火を焚いた」
「彼女は、恥じらいで顔に紅葉を散らした」
He burned（=was on fire）with anger.
She turned red with shame.
（上、２対の表現は、内容的に日英語は共通するが、言葉化の点で差がある。「火を焚く」と「burn」は近いが、「紅葉を散らす」と「turn red」は離れている。）

比喩表現が日本語にあって、英語にはない、また、この逆である。したがって、この点で日英語が異なるという事例はあまた加えられる。

「白ッ子のように気味の悪い男女であった」
「水のような表情で言った」
「苔のように暗い顔を伏せていた」
「シーツのように青ざめた顔をしながら……」
「彼は驚き、目を白黒させた」

He'd been beaten black and blue by a street gang.
She usually calls her mother when she's feeling blue.

You can tell your kids not to do something until you are blue in the face.
I knew you were quiet, but I didn't know you were yellow.
Her face went white with fear.

更にもう一点、日本語独特の色使いに、抽象的な形容が時々見かけられる。例えば、「喜色」がそうである。「男の顔に喜色が現れた」とか「顔に喜色を浮かべる」といった文脈で用いられる。これに対して英語では The color of pleasure appeared in his face. といった表現はしない。日本語の「喜色」といえば、前に触れたように、「赤味」を帯びた顔色を連想するのではないだろうか。連想が固定しているから、「喜色」という用語が一般化しているのだとも言えるのである。しかし英語にはこの連想はない。

日本語には「喜」に対して「悲」もある。「彼女の目に悲しみの色があった」とか「悲しみに色を失った」といった文脈で用いられる。「悲しみの色」といえば、「愁いの色」が並行してみいだされる。「曇った色」また「青色」が連想されよう。「青青とした愁いが風のように吹きかえる」といった例文が挙げられよう。

しかし、英語では There was a color of sadness. といった言い方はしない。日本語の場合ほどに sadness イコール blue の連想が固定していないからである。英語にも He was blue in his face. といった悲観・落胆の表情がないわけではない。しかし、この blue は他の感情も兼ねているのである。日本語のように「悲しみ」とか「愁い」と専属的に結びついているわけではない。

同じ見方は、「彼女の顔に恥じらいの色が溢れた」の例文にも当てはめられよう。日本語では「恥じらい」イコール「赤面」の連想が固定している。いるから、安心して、つまり分かり切っているので、「恥じらい」の色が「赤」だと断る必要がないのだ。英語にも She blushed for shame. といった表現がないことはない。しかし、実際にこの表情を露呈する人の数が、日本人の場合ほど多くはないという傾向上の違いも手伝って、問題の連想が固定していないからであると考えられよう。

抽象的な「何々＋色」の議論は微妙な議論に展開する恐れがあるので、この辺で逃れよう。要するに、当節では、日英語の顔色の捕え方、叙述の仕方には、違っている場合もあるが、共通する場合もあるということ、具体的にどのように比較されるのかが、押さえられたら、可としたい。

＊＊＊＊＊＊

ここからは論点の視座を変えて、言及しよう。これまでは、具体的な表情描写によって当該の人物像を浮かび上がらせようと努めてきた。これからは、抽象的な言葉使いによって同等の描写を試みる。論及の初頭で、「王監督」の人物像を描くのに 2 通りの伝達があり、一つは「恵比須顔」という「表情」を捕えるもので、もう一つは「満悦の ・・・ 」という「言葉」で活写しようと務めるものである旨、前置きしたので、ここからは後半の記述に当てたい。

伝達に際して、「表情（non-verbal）」によるにしろ、「言葉（verbal）」によるにしろ、内奥に、なんらかの「感情」がくすぶっていることだけは確かである。これがどのように表現化され、伝達されるのかが論及の的になる。

6　友　　好

該当の事例として、人間関係を取り上げよう。この関係を円滑に転ばすには相手に対する「友好性」が重要視されるであろう。手前が、先ず、友好的であることを示すことによって、つまり、その気持ちないしは感情を「言葉」で示すことによって、相手もそれ相応の反応を返すのである。友好的であることを言葉化、即ち「顔造り」を示すには、「微笑」がてっとり早い。微笑を土台に据えるといっても、善・悪多様にあるので、ここでは「友好」が出番になることから、その指向性にそった形容詞を被せるようにする。

例えば「快い微笑」「愛嬌のある微笑」「満悦の微笑」といった具合に言葉化を選ぶのである。そうすると、友好性を表現することができる。類する文例を加えよう。

「細い目（喜び）に微笑をふくませていた」
「撫でるような好意のほほえみを見せた」
「花が咲いたように微笑んで見せた」
「モナ・リザの微笑であった」

もちろん、「微笑」に類する表情の示し方は多数にあるので、それらも「友好」の示し方になる。「微笑」の代わりに「笑い」を当ててもいい。

「朗報に相好を崩す」「面白くなったという顔」「暖かな顔」
「会心の笑みを漏らす」「満面に笑みを浮かべたその表情はいきいきとしていた」
「客を笑顔で迎える」「思わず嬉しさで頬がゆるんだ」
「顔に気色を浮かべた」「笑いながら、晴れやかな顔をしていた」
「父の温顔（穏やかな、優しい顔）を思い出す」
「笑いながら、晴れやかな顔をして……」「うれしそうに顔を輝かせ息を弾ませる」
「君の屈託のない笑顔が嬉しかった」「顔を見合わせ唇に薄い笑いを浮かべ……」
「朗笑」「顔が喜びに輝く」「顔を嬉しそうにほころばせる」

友好を（微）笑いによって表現しようとするのは、普遍性があり、英語にも数多く援用されている。

She smiled at me in a friendly fashion.
She smiled a geeting.
He smiled his thanks.
He smiled her into good humour.
She smiled at a pleased welcome.
He smiled her out of vexation.

友好を表現するための顔造りの一端として、「微笑」が有効である旨、今、主張した。これこれしかじかの形容詞をスマイルに被せることによって、多様な「ほほえみ」を顔面に造りだし、細かな友好性を演出することも説いた。

手前が相手に対して、友好的であることは、もちろん、「笑い」以外の行為を顔面に表示することによっても可能である。この可能性を事例をいくつか挙げることで垣間見よう。

「海外旅行の話しに花が咲く」
「親友と語り明かす」
「示し合わせる」
「膝を交える」
「二つ返事で承諾する」
「身を粉にして働いた」
「東奔西奔の活躍をする」
「先生にお見舞いの品を差し上げる」

上に類する「友好的な行為」は他にいくらでも加えられようが、必ずしも「微笑」を併用させる必要はない。まじめな顔造りでも、相手は心地良くなるはずである。快くなるほどに、手前からの親交、親密、厚情を感じ取ってくれるであろう。

人と交わったり、行き来したり、近づきになったりするという行為も、なんらかの形で顔に現れるものである。その辺の起居振る舞いをうまく描写するのが、ここにいう「言葉化」の妙技である。人間関係あるいは「社交」を意図する言葉化の例を類義語辞典からいくつか拾ってみよう。

「あの人とは20数年の親交がある」
「水魚の交わり（親密な交際）を結ぶ」
「客を奥座敷に請じいれる」
「相合傘で行く」
「相伴ってハワイへ行く」
「人の前を通るとき会釈する（軽く頭を下げる）」

「生さぬ仲の親子（血のつながらない親子の間柄）」

友好また社交は、普遍的に、大切にされる概念であるため、その言動への反映、つまり「言葉化」は頻繁に活用される。上記例文は日英語に関わらず、ほぼ、正当とみなされよう。上の和文はそのまま英文に置き換えられる。

That man and I have been friends for 20 years.
We are close（fast）friends.
I invite my guest into the drawing room.
We go together under one umbrella.

上の日英語の表現は概念的に共に近いといのであって、慣用表現については、若干違う場合もある。例えば「水魚の交わり」は直訳すると、close friends like between water and fish. となるが、英語にはこの表現法はない、ないけれども、理解するのは容易であろう。

日英語の「友好」行動の表現の仕方に関して、違っている点を一つだけ指摘し、他に移ろう。それは挨拶行動に関する違いである。

出会い頭に挨拶をするとき、日本人は首（頭）を何回も上下に振るが、英米人は代わりに直立のままで目線を合わせたまま握手をする。両者の間には、「目線を合わせる」vs「合わせない」の違いがある。挨拶が友好的なものである程にの目線の儀式は守られる。

この点で、次の対になった表現は、英文の場合、友好を示すが、和文の場合、後で言及する「攻撃」になるかもしれない。

He looked into my eyes.
彼は私の目をのぞき込んだ。

He stared me in the face.
彼は私の目を見つめた。

もう一言、相手に対して、「誠意」を尽くし、嘘偽りのない言動を実行に移すことも、友好な顔造りの一助になる。

真面目な顔造りの言葉化として、次の厚情が挙げられる。

「真面目な顔になる」「真面目に暮らす」
「真顔で言う」「嘘はないといった顔をする」
「真剣な顔つき」

「目を逸らさないで、よく聞きなさい」
「(嘘をついたので）顔が合わせられない」
「(不誠実なため）彼女は目を落として答えた」

上のうたい文句も、抽象的で、具体的にどのような顔造りをするのか判然としないが、目付きに負う部分が多いであろう。この観測は普遍性があるだけに、英語にも同じようなうたい文句が拾える。

She answerd with a serious face.
He said it with a straight face.

7　敵　　意

友好の対峙点に位置するのが、当節で取り上げる「敵意」の感情である。われわれは、日常生活において、対者と友好的でありたいと願う一方で、逆に、感情のこじれから、敵意を抱き、憎しみを覚え、攻撃的になるものである。こういった逆らいの感情また反抗心は、人間関係の運営上、決して好ましい現象ではないが、現実に生起することであるから、話題に乗せざるをえない。攻撃するからには、それなりに、力強い「顔造り」を工夫するものである。敵意を表明するには、顔は、平面より、角張った面を、口も、普通より、尖らせる方が、威力がある。頬をふくらまし、しかめっ面をし、目眉に八の字を寄せ、青筋を立てると、相手に訴える威力は一層高まる。

敵意を顔面に反映させる仕種として、次の例文が拾える。

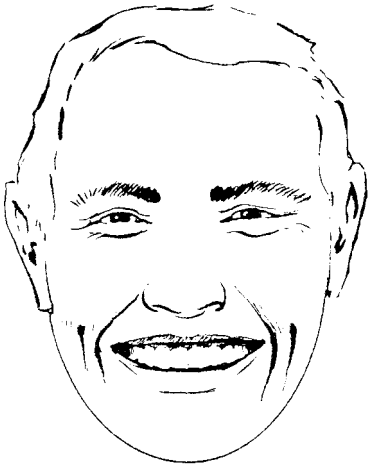
「目を怒らして、睨みつける」
「一言でも口を開ければ、怒りが燃え出しそうになる」
「怒りで目をギラギラ光らせる」
「強面（恐ろしげな顔つき)」
「唾を吐き出しそうな勢い」
「むっとした顔つきで、鼻の穴を膨らます」
「人を冷眼視する」「苦虫をかみ潰した様（ひどく不愉快な顔)」
「興奮したり、立腹したりして顔を赤くする」
「威嚇的な態度をとる」「冷笑（見下して冷ややかに笑う)」
「脅し文句で人を威喝する」「ぎょろつく（大きな目玉でにらみ回す)」
「居直る（態度を急に変えて、威圧的になる)」
「悪態をつく（悪口を言いののしる)」
「抗う（相手の言うことを否定して、自分の考えを言い張る)」

「一喝した（大声で叱りつけた）」一瞬間むっとした顔つきで鼻の孔をふくらます
「いがみあう（獣が互いにいきり立ち、吠えたり、かみついたりする）」

上の表現のどこに敵意のある攻撃が読み取れるのかは、断るまでもないであろう。「威嚇」「悪態」「一喝」などは、攻撃そのものである。
この種の顔造りは普遍性があるだけに、英語についても同じように言える。

She was burning with rage.
She blew up (=became suddenly angry) when she saw me.
Do you want to make me lose face by spreading a rumor like that ?
He was red with anger.
He glared in anger.
Father glared at me and said, I blazed up with anger.
She pouted when she was told to wash the dishes.

以上、6節で示した、微笑を主軸にした「友好」の顔造りのデッサンと、7節で示した、「怒り」とか「攻撃」を主にした「敵意」の顔造りのデッサンを引用しよう。どちらの図案が、どちらのものであるかは言うまでもない。

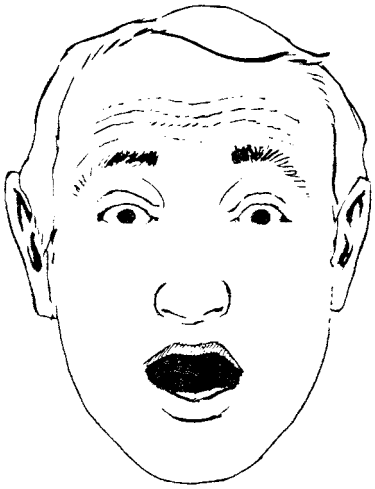


8　驚　　き

感情の概念が狭くなるが、また、すでに言及したことがらと重なるが、ここでは、日常的な「驚き」がどのような顔造りで言葉化されるのかを明らかにしよう。

「目」に関しては、「丸くする」「皿にする」「見開く」「剥く」「色を変える」などがあるが、その他一般的な「言葉化」としては、次の文例が挙げられる。

「私はびっくりしました、寝耳に水でした」
「彼女は驚いて、気絶した」
「彼女は驚き、蒼白い顔をしていた」
「私は驚き、足がぐらぐらした」
「驚きのあまり、声が出なかった」
「飛び上がるほど、びっくりした」
「びっくり仰天して、しばらく口が利けない」
「全身が電気を感じたようにピリットとおののく」
「相手の生き肝を抜く（ひどく驚かす)」
「これが彼の作品かと、目を疑った」



なお驚くと、自動的に目が開きがちになるが、この動作は生理的に口の開きをも伴うようである。「きょとんとした」とか「ぽかんとした」というのは、物事に驚いて、目が開くのと同時に、口も開いたということである。「開いた口が塞がらぬ」というのは、「口が開けっぱなしのままである」のと同じである。「唖然として言葉を失う」というのは、まさに、右の図案に見る通り目も口も開いた顔造りを指す。

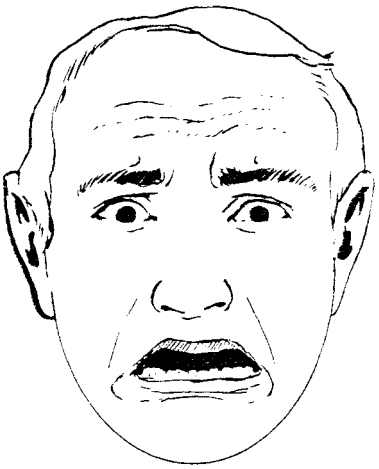
9　恐　　怖

なんらかの事物・事象に対して「恐怖心」を抱くのは、前節の「驚き」と同様に受動的な現象である。類義語に「怖じ気づく」「おののく」「おびえる」「怯む」などが挙げられよう。具体的に「高所恐怖症」「対人恐怖症」などと病的に捕えられることもある。

受動性が高いだけに、浸透度合いが強いだけに、心的なまた生理的、病的な現象につながる。「肝を冷やしたり」「総毛立ったり」「肌に粟が生じたり」するのである。

恐怖心に捕えられた顔造りのデッサンを引用すると、右の挿絵の通りになるであろうか。すぐ上の「驚き」の場合と比較されたし。「怖じ気づく」ことから生じる身体的特徴として、次の言葉化に読み取れるものが挙げられよう。

「胴震い（怪談を聞いて全身が震える）」
「ぞっとした顔つきをした」
「鳥肌が立った」
「寒け立つ」
「怖くなって、私は見じろきも出来なかった」
「血も凍るような無気味な時間が過ぎた」
「怖さに足がふるえた」
「怖くなると、歯の根をガチガチ言わせる」
「怖くてみぞおちのところがどきんどきんとする」



「飛び立つよな恐ろしさが込み上げてきてぎょっとする」
「空恐ろしくなって、全身の血が冷え渡ったようであった」
「身内の一時に逆流するような恐ろしさだった」
「白骨体を見つけて、声も出ず立ちすくんでしまう」

ところで、「驚き」と「恐怖」を巡る日英語の比較であるが、大筋は共通すると見て良い。何が誘発源となり、これらの生理現象を生み出すのかは、ほぼ同じである。例えば、ある知らせを耳にし、その内容に応じ、「びっくり」したり「怖く」なったりするのは同じである。

「ジョンが結婚したと聞き、びっくりしたよ」
I was surprised to hear John got married.

「犬が吠えたとき、私は怖くなった」
I was frightened when a dog barked at me.

しかし、例外的に、顔造りの言葉化が、慣用的なものになると、共通しなくなるので、要注意である。

「その知らせは私にとって寝耳に水でした」
The news hit me like a bolt from the blue.

それはそれとして、一見、慣用句と呼ばれる表現も直訳が可能になることの方が多い。例えば「怖くて、鳥肌が立った」は Fear gave me goose flesh. に、また「恐ろしくて、歯がかたかた

震えた」も My teeth chattered in fear. にそのまま言い換えられる。直訳が可能な分だけ日英語は共通している、ということになる。

＊＊＊＊＊＊

表面の「顔造り」の導引となる内面の「感情」はこれまでに取り上げてきた「喜び」「悲しみ」「友好」「敵意」「驚き」「恐怖」「恥じ」「立腹」などの他にもいくつか加えられるが、この辺で終止符を打つことにしよう。残された「感情」と「顔造り」の照合はこれまでに仕留めてきたやり方で片が付くものと期待される。

次の最後の節では、これまでに積み残してきた「顔造り」の具体的な意味づけをし、ややもすると不明点になりかねない問題を明らかにしておこう。

10　その他の不明点

読者の興味を喚起するため、クイズに解答を寄せてもらおうという形式で、どのような顔造りが正当なのかを考えていただきたい。確認されたい方は「知っておきたい日本語、コロケーション辞典、学習研究社、2006年」の頁の番号を開けられたし。

⑴　食べ物がたまらなく「おいしい」ことを顔造りに活かす比喩表現は？

１．目が落ちるほど　　２．顎が落ちるほど　　３．口が落ちるほど

正解は p. 9

⑵　口を大きく開けて、大笑いしたことを表明する。

１．顎が外れるほど　　２．口が裂けるほど　　３．目が痛くなるほど

正解は p. 9

⑶　恥ずかしいときや照れ隠しをするときの顔造りは？

１．口をつぼめる　　２．目を閉じる　　３．頭を掻く

４．頭をもたげる　　５．頭を搾る

正解は p.15

⑷　定足数に足し、全員の何がそろったので、会議を始めると宣言するのか？

１．目　　２．口　　３．顔　　４．頭　　５．鼻

正解は p.50

⑸　言葉が少なくて、多くを語ろうとしない人のことをなんと形容するか？

１．口が重たい　　２．口が軽い　　３．口が奢る　　４．口が堅い

正解は p.85

⑹　話していることと考えていることが違っている人のことを何と言うか？

１．口と頭は違う　　２．口と心は違う　　３．口と腹は違う

４．口と目は違う　　５．口と面は違う

正解は p.87

⑺　容疑者が白状することを何と言うか？

１．口を開ける　　２．口をたたく　　３．口をきる　　４．口にだす

５．口を割る

正解は p.90

要　　約

論及の目標は、細分化された「感情」と形分けされた「表情（顔造り）」の適切な照合を明示することにあった。その代表的な例に、「笑顔」と「喜び」が挙げられた。しかし、これだけでは実用に即さない。一口に「笑う」といっても、「大声で」そうする場合もあるし、「控え目に、小声で」また嘲笑的に「せせら」笑う場合もあるし、もう一方の「喜び」の方も「天にも昇る」場合も「頬を微かにゆるませる」場合もある。こういった分割された、「表情」と「感情」を混線することなく、組み合わせることは難儀な仕事である。

例えば、同じ「笑い」でも、開放的で声が大きいものであれば「おとがいを解く（顎がはずれるほど大きな口を開けて笑う）」と具現化するということで、仕種の分析から、感情も付随的に知れるようになる。つまり、背後に、自由な伸び伸び笑いが支配していることが、察せられよう。逆に、抑制的で、大笑いするのがはばかれるようであれば、「ほくそ笑む（いい具合にうまく行き、にこりとする程度にとどめる）」ということから、感情もこれに歩調を合わせたものというふうに絞られよう。しかし、こういった計算を他の場合も当てはめると、大変な作業である。それでも、そうであっても、この複雑な行程を踏まざるをえない。

踏み方の道程として、当論では大きく３点から覗いた。１つは、結果的な「表情」から、これらの内部にある「感情」を、２つは、逆に「感情」から「表情」を、３つめは、英語との比較を試みた。以上の記述で、どれだけ実体に迫れたか、心許ないが、一応ペンを置く。

引　用　文　献

論考執筆に最も影響を与えたのは松本清張の人物、特に「表情」の描写からであった。「当主は顔が長く、半日の髪を広い額の上にきれいに分けていた。眼が大きく鼻が肥え、口がひろい。鼻の両脇から唇の端にかけた皺も深い。要するに顔の造作がひとまわり大きく、……」といった叙述の仕方が魅力的で、類する例文をカードに書き取り始めた。5冊に目を通すと、かなりの論文の材料が出来あがった。

他の小説家—渡辺淳一、なかにし礼、井上靖、高樹のぶ子、などからも収集した。研究書としては、中村明の「比喩表現辞典」「感情表現辞典」が有力な支えとなった。それから座右の国語辞典、類義語辞典、英和・和英辞典も参照した。宮地裕・甲斐睦朗その他の「精選国語辞典」、北原保雄の「明鏡国語辞典」などからは頻繁に引用した。

人物画のデッサンについては Gary Faigin の ‘The Artist’s Complete Guide to Facial Expression’ を拝借した。